



2018年へのひと言
「その楽しむを改めず」(論語から)

仲間がいなければ、 研究者という 厳しい道は歩けなかった

日高義博 学校法人専修大学理事長

ですが、そこで植松先生のもと、初めて刑法学の研究ができました。植松先生は一橋大学で教鞭をとられていましたが、明治学院大学の大学院に法学研究科が新設されるというので移られました。「学は人なり」と言いますから、私は植松先生の行かれるところならどこへでも行こうと、同大学院へ進みました。そこで「君はなんでここに来た」と問われましたね。「先生に弟子入りしたくて来ました」と答えると、そこから5年間弟子稼業をさせてもらえなかったなら、刑法研究者にはなれなかったと思います。恩師の力は偉大です。

それから、友人のアメルンク教授も大きな影響を与えてくれた一人です。ドイツ留学中に知り合った友人で、アメルンク教授夫妻に会えたのもまた不思議な縁でした。私の刑法学のすそ野が広がったのは彼との出会いがあればこそで、法学方法論、法哲学、また他の分野の考え方についても同様です。ドイツ留学は客員教授として迎えてくれたので、日常的に法学部のスタッフとも話ができる立場でした。2年ほど親密な付き合いをさせてもらいました。留学以前からドイツ刑法学を研究していましたが、留学して日常生活を過ご

います。

専修大学へ入り、最高検察庁の検察官を退官して教鞭をとられていた神山欣治先生にお会いしたのが次の節目です。もともと実務家になるべく、検事を目指して法学部に進学しましたが、大学2年の夏、神山先生の授業を聞き「研究者になろう！」と決意しました。当時、1コースは36人ぐらいしかいませんでした。ゼミのような授業で、神山先生の講義はとっても面白い内容でした。自分なりに勉強して「こうだ」と思っていたものが、先生に限界事案を出されると、自分の考えがバラバラと崩れるのです。事案に理論を当てはめていくよりも、理論をつくったほうが面白いと、研究者への道を歩む決意をしました。もうこの時には「故郷には戻れない。親の面倒は見られない」と思っていました。

3人目を挙げるならば植松正先生の最後の弟子になったということです。私は明治学院大学の大学院に行きまし

人間の出逢いはすべてが不思議 数々の縁に恵まれて研究者となる

新年、あけましておめでとうございます。本年は専修大学にとって大学改革、キャンパス整備の完成に向け、重要な年になります。靖国通り新校舎の建設は2月に着工されます。完成まで2年ほどかかりますが、スタートの年となるので校友のみなさんにもご協力を賜れましたら幸いです。よろしくお願いいたします。

今回のテーマ、現在の自身につながる転機となった出逢いや出来事について、とのことですが、私も古稀を迎え、人生を振り返ると、人生の節目ごとにさまざまな出逢いがありました。まずは高校時代の恩師を思い出します。私は宮崎県出身で、高校を卒業しても地元である九州の大学に進むつもりでした。ところが恩師から「学問の先端は東京にある。東京へ行け」と。これがひとつのターニングポイントだと思

し、2カ月ぐらいうると日本語がパッと消えるのです。ドイツ語だけで思考して、話せるようになった時、そこからドイツの考え方、刑法学者のベースにある感性、真髄を知ることができ、日本とドイツを比較した時の原点の違いを理解することができました。アメルンクに遭わなければそこまで深く行かなかったかな、と思います。

専修大学で出会った一生の友達も大勢おり、いまでも付き合っています。仲間の一人は他界しましたが、みな健在で時には会ってお酒を一緒に飲みます。学生時代、彼らは物的にも精神的にも支えてくれました。たとえば、私は本を読む時に赤線を引いてメモを書き込みながら読む癖がありますが、図書館の本にはできません。そこで神田の古本屋で貴重本を買い求めのですが、一週間で仕送りを使い果たしたね……。いまでも捨てられない本がたくさんあります。昭和42、43年の値段で4,500円ぐらいという高価な本もありました。当時は宮崎までの片道運賃が2,700円、山手線ひと駅が15円でしたから、そんな本を買っていれば仕送りもなくなるのは当たり前で。いよいよ食事もままならなくなると、友人の世話になったり、友達のお母さんが「うちに来て食べなさい」と食事に誘ってもらいました。そういう仲間が



ひびきの専修大学
卒業証書の前に



卒業式を終えて、
前列左から2人
目が日高理事長。

いなければ、研究者という厳しい道は歩けなかったと思います。

大学院生当時、26歳の頃です。うちのカミさんに出逢い、食わせてもらったことも大変感謝しています(笑)。食えなかった研究者の卵の頃、人類愛に燃えた女性があり、彼女に拾われてやっとここまで来られたのです。彼女も植松先生のゼミにいたのですが学生時代は接点がなく、先生から「君は食事が出来ないと困るだろ、結婚しなさい」と言われ、「はい」と(笑)。人間の出逢いは不思議な縁で、必然的なものがあるのでしょうか。

130周年からのプロジェクトが いよいよ最終段階へと移行

本年は専修大学創立140周年(2020年)へ向けて、これまで準備してきたことがいよいよ実を結ぶ年となります。大学改革はそのひとつです。130周年からスタートさせ、140周年を着地点としてプロジェクトを進めてきました。改革を遂げ、創立140周年の成功を目指すとともに、続く150周年も視野に、新たなわが大学の基盤を構築するため、教職員一同尽力いたします。校友会、育友会のみなさんにご支援をいただきますと幸いです。

今後、18歳人口が減少していくのはご承知の通りです。2018年はこの将来を見据えた準備を進めていく節目の年になると考えています。生田、神田のキャンパス整備もそのひとつです。生田ではご承知の通り、9号館、10号館が建設され、東日本大震災の後に2号館、3号館が新しくなり、国際交流会館が完成。新体育寮や体育館も完成し、これらはほぼ予定通り進みました。

神田では、靖国通りの新校地に高さ80m、1号館が60mですからそれより20m高い新校舎を建設します。商学部が2020年から神田で授業を始める予定をしており、国際系新学部も新設予定です。あわせて神田校舎では、すでにある校舎の改修もしながらキャンパス整備を進めることとなります。これらの実現に向けて全力を挙げていく所存です。

本年は2年後に迫った創立140周年へ向けて、決定している計画を成功させるために一つひとつ履行しながら、無事に完成をめざします。今年、来年と着実にノルマをこなし、進めるように後方支援を惜しみません。オール専修のみなさん、ご支援の程、よろしくお願い致します。

(2017年11月9日 神田校舎にて)